
ヒカリと闇と

仮眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカリと闇と

【Nコード】

N6806D

【作者名】

仮眠

【あらすじ】

魔王を倒しても得られるものは何も無い・・・むしろ何も残らない・・・勇者の存在意義を失った・・・その存在価値も失った・・・

（前書き）

注意

これは、ボクが書く初めての文です。醜いです。読みにくいです。
それでも楽しんで頂けたら光栄です。

悪い意味では、討伐の依頼などでやりすぎる事、戦闘以外の能力がやたらと低くて失敗する事、極め付けがどんな依頼でも必ず町の一部を破壊する事。

故にそんな彼らには仕事が無かった。

「あゝ、暇だ！仕事をよこせ！敵を切らせろ！」

「・・・もう完全に」「危ない人だね・・・」

そんな会話を繰り返すしかない3人。

「お前達うるさいぞ。少しは周りの事も考えろ」

「ああ、マスター。仕事を・・・仕事を下さい・・・」

「・・・気持ち悪いからやめてくれ」

マスターが心底嫌そうに呟いた後「そうだ、丁度お前達しか出来ない仕事があるんだがやってくれないか？」と言うといきなり説明しだした。

マスターの依頼はこうだ。

この町から南にしばらく行ったところに洞窟があるらしい。町の人達がそこに最近魔物の気配がすると言うのでマスターが行ったところ魔物ではなく悪魔もしくは精霊の類の気配だと言う。少なくとも魔物には出せないプレッシャーがあったと言う。しかしマスターは魔物ならば倒せるが悪魔や精霊クラスの敵には敵わない。そこで元勇者御一行にその気配の正体を探ってくるのとできる事なら処理して欲しいとの事だ。

話を聞き終えると元勇者は

「悪魔クラスか・・・いいだろう。久々に腕が鳴るぜ」

「楽しい狩りの」「始まりですね」

3人は嬉しそうに洞窟へと向かって行った。

「ここだよな？」

「ええ、そうですね」

「全然気配を感じませんね」

「ああ、悪魔はおるか魔物の気配すらかんじねえ」

「「でしたらふたつにひとつです」」

「もういないのか」「僕達が来るのを感じて気配を消したか」

「前者なら最悪だが後者なら・・・」

「腕が」「鳴りますね」

「ああ、祈ってるぜ。強い奴がいるのをなあ」

そう言って進む先は暗い闇に包まれた暗黒の洞窟。気のせいかいつもに増して薄暗く感じる洞窟に3人が入っていく。

洞窟に入ると、元勇者一行を魔物達が襲い掛かってきた。それを殺しながら奥へ奥へと進んでいく。ある程度進んだころ。

「なあ、この気配ってまさか・・・」

「あなたもこの気配に」「覚えがありますか」

「てことは、やっぱり・・・」

「ええ」「おそらく」

「」「魔王」」「」

「まあ、あのころほどの威圧感は」「感じませんけどね」

「似てるのは確かか・・・」

迫りくる魔物達を切り殺しながら会話をする元勇者達。入り口から数えて500以上もの魔物を殺しているのに疲れた様子も見せない。すると不意に3人以外の者の声が響いた。

「おお、誰が来るのかと思えばお前は勇者か？だとしたら魔物ごときにお前達の相手は無理だろうな。お前達、もう襲う必要は無いぞ。無駄だからな」

そう言っとうと今まで襲い掛かって来ていた魔物達が嘘のように動かなくなった。

「これでこちらまで来れるだろう？な」に遠慮は要らん。私もあのころの私ではない。襲い掛かったりしないから安心するが良い」

その声を聞きながら元勇者達は、魔王の元へと向かっていく。

重たい両開きの扉を開けるとそこには魔王がいた。

「よく来たな、勇者よ」

魔王は愉快だと言わんばかりの笑顔で言ってきた。

「戯言はいい、ここで死ね」

元勇者は、まったく感情がこもっていない。完全に自分の意思を消して言った。

「くくく、相変わらず本気で殺しあう時は己の感情を消そうと頑張るか・・・その姿なんとも健気で愛おしいものよ」

その言葉に元勇者は忌々しげに顔を歪める。

「何が言いたい」

「いや、何・・・我もお前も人間共に嫌われておるからのう。ここら辺でいがみ合うのはやめて手を組まぬか？」

「は、俺がお前と？冗談だろ？」

「冗談ではない！我は魔王だ！だがしかしそれ故に我を恐れ逃げるものは多い。人間はもちろん悪魔でさえ我からは逃げていく。力が強いと言うのも考え物だな・・・」

「・・・」

「そこで、我と同等もしくはそれ以上の力を持つお前なら逃げることは無いだろう？だから・・・我の仲間にならぬか？」

元勇者達は喋れない。同じ境遇だから。力があるから友だと思っていた者達に逃げられ時には裏切られ・・・。元勇者達が今《3人組み》だと言うのも仲間逃げられたからだ。魔王にたつた3人で挑むはずが無い。最初は約50人いた。しかし逃亡と裏切りで今はもう3人しか残っていない。最初は魔王を恐れて逃げ出しているのかと思った。しかし彼らは確かに勇者に恐怖を抱いて逃げていた。

「だが、俺にはこの世界の人々を守る義務が・・・」

「恐れられ、迫害され恐怖の対象だった我、魔王と同じ立場を味わったのなら分かるはずだ。人間は、守るに値しない・・・とな」

強すぎる力は恐怖でしかない。たとえそれが味方の力でも。故に

迫害する。故に排除する。

「勇者よ。我はお前と新たな世界を築きたい。強者が恐れられぬ世界を・・・共に築こうではないか。我はお前となら、お前ならば共に築いていけると思っただからこうしている。今までも信用できる者もわずかだがいた。しかし、その者達も結局は我の力に恐怖し逃げていった」

「だ・・・だが、俺は人間だ。お前と一緒に世界を築くにしても俺はすぐに死んでしまう」

「我にかかればお前を我の同族にする事など簡単なことだ」

「また、俺はお前を殺そうとするかも知れないんだぞ？」

「その時は止めるまでだ」

「いいのか？俺は一度お前を殺してるんだぞ？」

「あれぐらい・・・我に対してもっと酷い事をした者を仲間に取り入れたこともあるぞ」

「本当にいいのか？俺を恐怖しないのか？共に歩んでいけるのか？」

「ああ、お前が望む限り我はお前と共に在ろう」

人が人である限り、孤独には勝てないのかも知れない・・・たとえばそれが闇の奥へと続く道だとしても。そしてこの場にいながら傍観していた双子の剣士と魔法使いが何か喋っている。

「たとえ世界を敵に回しても」「たとえ力が無い者を殺しても」「歩みを止めない」「ヒカリを消さない」「それがあなたの望む道なのですね」

そして契りは結ばれる。ヒカリと闇との甘い契りが・・・

勇者は落ちる深くで甘い闇の中へと・・・

すべては、何も変わらない。ただ正しい形に戻っただけ・・・

天使も勇者も神だろうと、この世に闇に染まらないものは無い・・・

それはとても悲しい現実・・・

だから誓おう、ボクは仲間を決して見捨てないと・・・

未来が無くても力が無くても恐怖があっても何があってもボクは

仲間を見捨てない。ボクは仲間から逃げたりしない。死と隣り合わせでも仲間が望む限りボクは仲間と共に在る・・・

それがボクの生きる意味だから・・・

仲間を守りたいから・・・

他の人間なんてどうでもよかった・・・

だから何も変わらない・・・

ボクはただ・・・仲間を守って生きるだけ・・・

（後書き）

読み終えたのですか？このつまらない文を読みきったのならあなたは凄い！

こんなにつまらない文を読んでいただきありがとうございます。

てかこれのジャンルがいまいち自分でも分らない・・・

これって何のジャンルだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806d/>

ヒカリと闇と

2010年10月8日15時36分発行